

今昔物語集の「誘」

——語義変遷の方向について——

山 口 康 子

- 一、今昔物語集の「誘」の訓み
- 二、今昔物語集の「誘」の分布
- 三、今昔物語集の「誘」の意義
- 四、今昔物語集以前のコシラフ
- 五、古辞書・和訓のコシラフ
- 六、今昔物語集以降のコシラフ
- 七、語義変遷の方向

先に私は、今昔物語集の「繚」をめぐり、それが自動詞と他動詞の間をたゆたう姿を把えてみた。^(注1)語の意義・用法は時の流れと共に必然的に推移するが、それを内へ向う方向から外へ向う方向への流れとして跡づけてみたわけである。

ところで、文献に見出す限りにおいてはそもその始まりから他動詞として出発する動詞も勿論ある。そのような語における意義変遷の方向はどのようなものであろうか。以下、今昔物語集にみる「誘」を手がかりにそれを考察してゆきたい。

一

今昔物語集の「誘」字の訓みは、用例の大半に「誘へテ」(巻

今昔物語集の「誘」(山口)・

一、第六語、古典文学大系本「岩波書店」一冊め、69ページ、15行め、以下「一—6、69ペ15」と略記する。」「誘フト云ヘドモ」(一九一27、117ペ5)などの如く活用語尾が明記されているため、八行下二段に活用する「コシラフ」であることはほぼ確実である。全訓の捨仮名、もしくは、シ又はラからの捨仮名も見出せず、八行の活用語尾のみであるから、勿論、現代における「誘」の訓、サソフである可能性も皆無ではない。しかし、色葉字類抄において「誘」字は「コシラフ、与久反」(前田本下9ウ3、黒川本、下8オ3)と訓じられ、類聚名義抄においては「誘」字に対する計十一種の和訓の筆頭がコシラフである。類聚名義抄における和訓の順序には勿論それほどの有意性を認め得ないにしろ、八行語尾をもつ異訓、ヨシフ、サソフ、ヤトフ、スクフ、などに従うべき積極的な理由はないばかりか、類聚名義抄における第二訓、ヨシフについては、「養育シテ誘へ教へテ」(六一15、81ペ12)の例がむしろ反証となるであろう。以下、今昔物語集の「誘」字はコシラフと訓じるものと認め、八行下二段動詞コシラフの語義の変遷について考察をすすめた。

二

今昔物語集全三十一巻中、固有名詞などを除いて「誘」字の動

詞用例は第一表の如くである。単独動詞としても複合動詞としても全巻を通して用例が見出される。しいていえば天竺部にやや頻度が高いがこれは巻一に単独動詞例、計四例を見出すためで、こ

れとても特筆するほどのものではない。複合動詞になる場合は第一項にも第二項にも同様に立ち得る。

第一表 今昔物語集の「誘」
(空欄は、用例のないことを示す)

巻	単独	複 合		小計	計
		第一項	第二項		
1	4	1		5	9
2	1			1	
3			1	1	
4	1		1	2	
5					
6		1		1	2
7					
9	1			1	
10					
11		2	1	3	9
12					
13					
14	1			1	
15					
16					
17					
19	3			3	
20	1	1		2	
22					5
23					
24					
25					
26			3	3	
27					
28					
29			1	1	
30					
31	1			1	
計	13	5	7	25	

今昔物語集において「誘」は、天竺・震旦・本朝のいずれにもひとしく用例を見る語であるといつてよいであろう。すなわち、典拠を漢籍・仏典に仰ぐ漢文訓読調の文体が主流をなす部分にも、出典未詳などの和文体の部分にもひとしく用例を見出し得る。日本古典文学大系本(岩波書店)の頭注を参考に典・原典を考えてみると、「誘」字を見出す関係説話計二十三語(一語に計三例を見出す事例が一つだけある。)のうち、過去現在因果経・経律異相・大唐西域記の如き仏典・漢籍もしくは日本国現報善悪靈異記や本朝法華験記などの本朝説話集に出典を見出すもの計十三語、出典未詳のもの計十語であり、出典の有無はほぼ相半ばしている。原典を有する語において、その原文を探ってみると、例えば、日本靈異記に原話を求め得る計二語のいずれにも原文に

「誘」字はなく、該当の箇所は、「教化」(古典文学大系本、巻上、第七縁、90ペ11、以下、特に断わらない限り、引用はすべて、古典文学大系本のページ数、行数による。」「語之日」(巻上、第二十三縁、124ペ7)となっている。同様に、漢籍・仏典に原拠を見出すものにおいても、おおむね該当部分に「誘」字は見出し難いもののようにある。但し、巻一第三語「悉達太子在城受樂語」にみる「誘」字の本集初出例「日々二人ヲ奉リテ太子ヲ誘テ宣ハク」(一3、60ペ3)は、原典、過去現在因果経巻第二において「日々遣人、慰誘太子」に作るようである。このような事例は更に博搜すれば若干は増えることと思われるが、大よその傾向としては、本集における「誘」字の使用は、出典に左右されたものではなく、編述者自身の用語と考えてよいであろう。ひとしく全巻に用例を見出すこ

とあわせ考え、文体などに左右されない基礎語彙的な用語と考
えられる。

三

今昔物語集全巻に、用例数こそ多くはないが満遍なく用いら
れ、出典・原拠にかかわりなく現われている「誘」の意義を以
下、検討する。

(A) 単独動詞の例

①王此ノ事ヲ聞給テ思ス様「……」ト思シテ大ニ嘆キ悲ビ給テ、
日々二人ヲ奉リテ **太子ヲ** 誘テ宣ハク「……」ト。(二―3、
60 ペ3)

②魔王此ヲ見テ軟ナル語ニテ **菩薩ヲ** 誘ヘテ申サク、「……」
ト。(一―6、69 ペ15)

③三摩耶外道、其ノ城ニ有テ城ノ人ヲ教ヘテ云ク「……」**年盛ニ**
シテ形美麗ナル女ヲ 見テハ『世ハアヂキ无キ者也、尼ニ成ネ』
ト誘ヘテ頭ヲ令剃ツ。只如此ノ事ヲ教テ人ヲ計リ欺キ……ト。
(一―14、82 ペ12)

④**妻**ノ云ク「……」ト云ヒテ、夫此ヲ歎クト云ドモ善々ク誘ヘ
テ此ノ衣ヲ脱テ帖テ尊者ニ申テ云ク「……」ト。(一―32、114 ペ
13)

⑤然レバ国王、万ヅニ付ケテ誘ヘ給フト云ヘドモ更ニ趣ク気色无
シ。(前文の主語、后、二―16、150 ペ17)

⑥夫、**妻ヲ** 誘ヘテ云ク「……」ト云テ止ツ。(四―20、302 ペ6)
⑦一人ノ人有テ、**申生ヲ** 誘ヘテ云ク「……」。(九―43、259 ペ
13)

今昔物語集の「誘」(山口)

⑧僧、様々ノ言ヲ以テ **女ヲ** 誘ヘテ云ク「……」ト約束ヲ成シ
ツ。(一四―3、277 ペ17)

⑨**袖ヲ**引カヘテ泣ケルヲ トカク誘ヘテ叩キ臥ヲ其程ニ竊ニ出
ニケル。(一九―10、87 ペ1)

⑩父ノ法師、「……」ト誘フト云ヘドモ**母**ノ心可止キニ非ズシ
テ音ヲ擧テ泣キ叫ブ程ニ (一九―27、117 ペ5)

⑪**海賊**……弘済ニ云ク「……」ト云ヘバ、弘済手ヲ摺テ誘フト
云ヘドモ、**海賊**不用ズ。(一九―30、122 ペ4)

⑫此ヲ見ル人、**瞻保ヲ** 誘ヘテ云ク「……」ト。(二〇―31、194
ペ6)

⑬此ノ二人彼ノ所ニ行テ… **軍共ニ** 向テ云ク「……」ト誘ケル
ニ (三一―24、291 ペ1)

(注) 説明の必要上、①②③……以下、用例番号を付して、全例をあげ
た。文中□□で囲んだ語は、「誘」の目的格である。ヲ格もしくは
はニ格で、文中にそれが明示されず、文脈上、判断できる場合は、
□□で囲んだ。

この計十三例を縦覧してみると、いくつかの構文上・内容上の
特徴を指摘できると思う。次に掲げてみる。

1、いずれの場合も対話場面に用いられている。「誘」に前後し
て同文中に、宣ハク・申サク・云ク、などの語を伴ない、直接
話法の形で話者の言葉が引用されている。その形式をとらない
用例は④⑤⑨⑪の計四例であるが、そのいずれも、表現内容か
ら、思惟の表現などではなく実際にその場で具体的な言語表現
がなされたことは明らかな事例のみである。単に言語表現がな
されたにとどまらず、どのような内容の言説がなされたか、単
純に一語の発言などではあり得ず、言葉をつくしての説得、依

頼、感謝などであることさえ極めて明らかである。

2、いずれの場合も対話の内容や対話の効果の方向が同等である。すなわち、対話を行なうことによって相手の感情・意志・行動に影響をもたらし、ある種の変容を与え、相手の期待する型にはめようとするものである。(1)感謝・激励、(2)教化・訓導、更には(3)詐謀・籠絡などにも及ぶ、相手の精神への強い働きかけを内包している語である。前記(1)(2)(3)の段階を追うにつれて、相手の心への斟酌が薄くなり、話し手の側の都合が色濃く出て来て目的のためには手段を選ばず言辞を操って、相手を自己の思いどおりに動かそうとするところまでも進む。最後には、他を自己の意志の顕現としての対象視した視点しか残らなくなる。「誘」字が現代においてはサソフと訓じられているのは、後に述べるコシラフの意義変遷が「誘」字にそぐわなくなったせいでもあるが、ここにみる強い他への働らきかけの勢いのゆえんでもあろう。

3、いずれの場合も、構文上、対話の話し手と聞き手が文面に明示されている。ヲ格もしくはニ格を伴って目的格を示す語句が文中に現われず、誰に対しての「誘」であるかの明示のない事例は、⑤⑩⑪の計三例のみであるが、これらも、文脈上の表現、もしくは前文との関連によって聞き手は明瞭な事例である。文中に目的格としては存在しなくても、同文中もしくは近接文中に句の主部などの形で聞き手は明示されており、誰が誰に対して「誘」(こしらふ)のかは疑問の余地がない。かかる目的格表示は、いわゆる和文体の文章に比して、今昔物語集の文体の一つの特徴ともいえる。今昔物語集の内部においてもその文体の相違によって、天竺、震旦、本朝仏法部においてはそ

の特徴がより明瞭にあらわれることもすでに云われていることである。しかし「誘」においては、一般的な特徴以上に、対象が明示されることが必要であるらしいことに注目しておきたい。

(B) 複合動詞の例

(イ)「誘」が複合動詞第一項に立つ場合

⑭然レバ難陀、静堂ニ居テ、佛漸ク誘ヘ直シ給フニ、難陀歆喜ス。(二一—18、89ペ11)

⑮其レヲ母有テ養育シテ誘ヘ教ヘテ、泥ニ不令還ズ。(六一—15、81ペ12)

⑯天皇……「吉備大臣ハ、廣継ガ師也、速ニ彼ノ墓ニ行テ誘ヘ可掬キ也」ト仰セ給ケレバ

⑰吉備、……西ニ行テ廣継ガ墓ニシテ誘陳ジケルニ……吉備、……陰陽ノ術ヲ以テ我

⑱ガ身ヲ怖レ无ク固メテ、慙ニ掎誘ケレバ、其靈止マリニケリ。(二一—6、69ペ11、12、13)

⑲狛師云ク「……」ト慙ニ誘ヘ云ヒケレバ、聖人ノ悲ビ不止ズ。(二〇—13、171ペ1)

(ロ)「誘」が複合動詞第二項に立つ場合

⑳佛、盧至長者ヲ勸メ誘ヘ給テ、為ニ法ヲ説給フ。(三一—22、241ペ9)

㉑佛師、佛前ニ詣テ、……佛ニ白シテ申サク、「……」ト申ス時ニ各爭テ責ム、相語ヒ誘ルニ其心不止ズ。……」ト申ス時ニ

(四—16、297ペ4)

㉒前条にあげた㉑の例(二一—6、69ペ12)

㉓弟、云ヒ誘ヘテ内ニ将入トテ……此兎埋ノ男ニ然気无テ付

ツ。(二六—5、425ペ14)

②③而ル間、**生贄**、舅ノ家ニ行テ……「和君、門ヲ開テ云誘ヘヨ」
トイヘバ(二六—8、437ペ13)

②④**女の童**ノ云ク「……」ト云ケレバ、主、「……」ト思テ、……。「」ト云誘ヘテ出シツ。(二六—20、468ペ16)

②⑤男此レヲ聞テ……気色ヲ**妻**見テサメト哭ケバ男云ヒ誘ヘテ心ノ内ニ思ハク「……」ト思エテ(二九—4、144ペ16)

複合動詞になる計十二例の「誘」については、第一項に立つ計五例の下接動詞、および第二項に立つ計七例の上接動詞はともにある種の限定があるようである。

下接動詞、云フ(1)、陳ズ(1)、掘ル(1)、教フ(1)、直ス(1)の計五語。

上接動詞、云ヒ(4)、相語ヒ(1)、掘リ(1)、勧メ(1)の計四語。

(注) (一) 内の数字は、用例数を示す。

この上・下接の動詞を意味上整理してみると、大むね次のとおりであろう。

云フ系—云フ、陳ズ、相語フ

教フ系—教フ、直ス、勧ム

掘ル系—掘ル

「掘ル」は、「誘」とほぼ同義とのことであり、類聚名義抄には

「誘」にオコヅルの和訓もある。「掘ル」は「誘」に上接もし、

下接もしているが、いずれにしても、同義反復的な複合語である

と考えてよいであろう。「教フ」系についても前述したごとく、

類聚名義抄の「誘」の第二訓がヲシフであり、同じくススムの訓

も見出す。これも又、類義とみなしてよい。更に「云フ」系につ

今昔物語集の「誘」(山口)

いていえば、同じく類聚名義抄に、「誘」と同じくコシラフの和訓をもつ漢字は計十一を数えるが、そのうち、「謔」「論」にはコシラフと並んでイフの訓もある。これも又同系列の意義を担っていると考えてよい。すなわち、今昔物語集において、「誘」が複合動詞としてあらわれる時、その複合の片割れは「誘」と同義反復的な意義範疇の語に限られているわけで、結局、表現内容としては単独動詞用例の場合と大差ない。すなわち、言をもって他の人物に働らきかけ、慰め、教え、導びき、感化を与え、影響下に、いうならば支配下に置こうとする話し手の意志の表現である。複合動詞用例の場合には、単独動詞の場合ほどには構文上の特徴は明瞭ではないが、なお話し相手、対者を明示すること、実際の言語表現が前提になっていること、対話の内容は前後の文脈から明瞭であること、などの傾向がうかがえる。

ところで、今昔物語集における「誘」が以上の如く、複合動詞をつくる場合に必らず同義語反復的な形をとっているのは何故であろうか。それはいわば文選よみにも似て「誘」の語義を説明・規定しているかにも考えられる。今昔物語集中、全二十五例の用例は勿論多いものではないが、単独動詞の場合には、直接話法の会話を近くにひきつけ、対話相手を文面に明示するという構文法によって、複合動詞の場合には、同義語反復的な語構成法によって、等しくその表現が助けられていることが明らかにになった。

「誘」の使用が、等しくこういう補助手段で助けられているということは、「誘」もしくはコシラフの意義が、又は「誘」字とコシラフとの結びつきが、今昔物語集成立当時、若干曖昧になっていて、何らかの形で補足説明を必要にしたのだとは考えられな

ない。

以下はその観点からコシラフの語義を考えてみたい。今昔物語集における「誘」字の意義については前述によって明らかにし得ていると思う。それが当時の言語社会の中でどれほどの安定性を保っていたかというところに問題がある。

四

今昔物語集とほぼ同量の言語量を持つと考えられる源氏物語にもコシラフの用例はさほど多くはない。単独動詞計二十一例、複合動詞第一項計十例、第二項計四例、合計三十五例を数えるのみである。今昔物語集本朝部の調査でもほぼ明らかではあったが、コシラフが和文語として平安期和文に頻用されるものではないことを、この数値は示している。事実、蜻蛉日記全一例、宇津保物語全十例、落窪物語全一例、夜の寝覚全十二例など、平安期和文資料を検して得られるコシラフの用例は極めて少ない。又、歌語でもないことは、正統の国歌大観に徴する限り和歌用例は次の一首のみであることから明らかであろう。

こしらへて仮の宿りに休めずは 誠の道をいかでしらまし 赤染衛門

(後拾遺集、巻二十、釈教、化城喻品、一一九四)
その他、韻文用例としては、梁塵秘抄に次の二例を見出すのみである。

。四大声聞こしらへて 三界火宅ををしへいたし 白牛のくるまをさしよせて 直至道場さたまりぬ (譬喻品六首のうち、71)
。龍女がほとけになることは 文殊のこしらへところそきけ さそ

まうす 婆からわうのみやをいでて 変成男子としてついに
成仏道 (経歌八首のうち、292)

これらは一見して分るとおりいずれも教化・説諭の意味で用いられている。このような仏教関係の唱導資料においてはコシラフは、今昔物語集にみたと同じく、教え諭し、善や正に他を誘導するという意義で用いられていることは明らかである。

では、源氏物語の全三十五例を筆頭とする和文資料の中のコシラフについても、そのまま同じ意義・用法を認めてよいであろうか。私が現在のところ見出し得た平安和文資料の用例は前掲韻文用例計三例を除き、散文用例は、蜻蛉日記・宇津保物語・源氏物語・落窪物語・夜の寝覚の計五資料に、総計五十九例がすべてである。この計五十九例を検討してみると、おおむね今昔物語集の場合と同様な意義・用法がうかがい知られる。例えば、蜻蛉日記に唯一例、上巻、康保三年八月條にみるコシラフは次の如くである。

。こはなぞ／＼といへどいらへもせで、ろんなうさやうにぞあらんとをしはからるれど、人のきかむもうたてもくるほしければとひさしてとかうこしらへてあるに五六日はかりになりぬるに音もせず。(155 ぺ 15)

「はかなきこと言ひ言ひのはて」に兼家が幼ない道綱に「われはいまは来じとす」と捨台詞をいって帰って行った後、泣いている道綱を作者が慰めている場面である。和文資料に見出す用例はこのように、コシラフの主格や目的格が文面に現われてこない場合が多い。しかし、この蜻蛉日記の場合も、コシラフの主格は、いい争いのあげく取り残された道綱母、目的格は「おどろおどろしう泣」にいて「幼き人」道綱、であることは、前文によつ

て疑問の余地がない。

平安和文資料におけるコシラフも、人が人に言葉で働らきかけ、相手の感情・意志・行動に変容をもたらそうとする意義でおむね用いられているといえる。

複合動詞の上接語は、言フ（宇津保・源氏）、聞ユ（宇津保・源氏）宣フ（源氏）、ナグサム（夜の寝覚、ナゴム（夜の寝覚）、であり、下接語は、ナグサム（夜の寝覚）、ナビカス（源氏）、入ル（源氏）、置ク（源氏）、ヤル（源氏、夜の寝覚）、ワブ（源氏、夜の寝覚）、カヌ（落窪、源氏）である。補助動詞としてのキコユが下接する例は多い。これも又今昔物語集にみた傾向と大きな違いはみられない。ナグサムは、今昔物語集におけるオコゾルと同様にコシラフに上接も下接もするが、その意義はコシラフと同義語的であると考えてよい。類聚名義抄においてコシラフの和訓を持つ文字の一つに「慰」がある。ナゴムもナグサムと同義的であるし、言フ、聞ユは、言語表現にかかわるものであることを明示していることになる。入ル、置ク、ナビカス、ヤル、ワブ、カヌについてはその行為の方向や度合について示すのみでいわば補助動詞的な性格が強いといえよう。すなわち、平安和文資料においても複合動詞となる場合には補足説明的な語を接しているといえる。

一方、訓点資料の中で「誘_レコシラフ」はどのように用いられているのであろうか。手元の僅かな資料を検し得たのみであるが、その中でも次のように用例を見出した。

。常に法施を行し、群迷を誘_レ進_メて、大果を得。

（「西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究」巻三滅業障品第

五、春日政治、勉誠社、44ページ）

。撫育テ四生ヲ為吾子 誘コシラヘテ 世中ヲ 預アツケ給ヒ

今昔物語集の「誘」（山口）

（「東大寺諷誦文稿の国語学的研究」中田祝夫、風間書房、175頁）
その他、音義類にも次のように見えるということである。

。誘 訓古之良布（華嚴音義私記）

。誘 古之良布（最勝王經音義）

コシラフの原義は、言葉で―説法や説教による教化の形で―人を誘い導くというものであったのであろう。従って仏教的な資料に多く見出されるのも当然といえるが、平安期において、言葉であれこれと言ひ慰め、教えさとし、善・正に向わせ、そこから発展して、言葉巧みに言いつくろう、いいくるめるといふあまり甘ばしくないニュアンスの語義にまで展開していったと思われる。その地点からは、「工夫・才覚・操作によって構え作り出す」という現代語の語義への移行はほんの一足であらう。

平安期において、すでにその方向に発動していると考えられる用例を僅かではあるが見出す。

。右大将、今は聞えさせむもいと畏けれども「たつことうきかげ」の心地してなむ。いでや、

八百萬あれたる神はネぎつれど

君は物きく時のなきかな

おほくの年月を えこそこしらへずなりぬれなときこえ給へり。（宇津保物語・菊の宴、(二)54ページ）

これは、あて宮入内が決定した後に懸想人の一人、右大将兼雅が歎きの想いを述べている部分である。和歌につづく文の詞は、一見、コシラフの対象が「年月」という人間以外のものであるかに錯覚させる。しかしこの場合コシラフの直接の対象はあて宮その人であるとみなすのが妥当であらう。多くの歳月があったにも拘らずあて宮の気持を自分に向けさせることができなかった兼雅

の歎きがそこに示されているのである。あて宮自身への文であれば「あなたを」などの目的格が省略されるのはむしろ当然である。このコシラフは、現代的な、「多くの年月」を「工夫・才覚によって意の如くに構え出す」意味ではあり得ない。それでは入内のきまったあて宮への最後の懸想文としてあまりにも味わいの薄いものになる。間にあった永年月にも拘らず言葉巧みに言い寄ることのできなかった己れの無力さへの自嘲をこめた歎きと解してこそ意味がある。コシラフは言説をもって―実際には和歌をもって相手の心を動かすことの意ではあるが、文面上、かなり曖昧になっているのである。

。和琴はかのおとゞ許こそ、かくをりにつけてこしらへなびかしたる音など心にまかせて掻き立て給へるはいと殊に物し給へ。

（源氏物語、若葉下(三)350ぺ5）

源氏と夕霧が和琴を論ずる場面において、夕霧が紫の上の琴を誉める言葉で、琴の名手・致仕の太政大臣だけが折にふさわしい琴の音色を工夫し演奏することができると述べているこの文においてはコシラフの対象を「音色」と考えざるを得ない。すなわち、言葉によってではなく、琴の手と和琴の技倆によって、人ではなく琴の音色を工夫し変革することができるということのようである。勿論琴の音色とそれを弾じている人物とは不可分一体ではある。又楽の音色はあらゆるものの中で最も人の言葉に近いものでもあろう。しかし、言葉ではない。「人が言葉によって他の人を動かす」という従来見出してきた用例を超えた、異質のものともみなしてよい。それは人の営為ではあるが、「工夫と技倆によって」「音色を」「をりにつけ」たものに仕上げてゆくという表現である。ここに後世「構え出す」「造作する」という意義に

コシラフが展開する可能性が秘められていよう。言葉によってという手段さえも限定されて人間を対象としてしか用い得なかったかにみえたコシラフは、すでに源氏物語において僅か一例ではあるが、「楽器演奏の腕前・技倆によって」人間以外のものを対象に、工夫の行為とみなし得る例を示すのである。

今昔物語集の「誘」は、説教・唱導の伝統に基づき先述の如き本来的な用法のみであった。しかし和文の世界ではそれに先がけて別種の用法が息づき始めていたのである。それは「言葉によって人を左右する」という営為そのものの中に、より効果的に人を動かすためには、言葉という媒材そのものの運用についての工夫もしくは作為を必然するものであることを思えばむしろ当然の結果といえよう。人に影響を与え、人心を動かすものは、ひとつに仏教的な説法による教化のみではない。先の源氏物語の用例においても、極だった和琴の音色が聞くものの心を動かすことはいまでもないことである。仏教的な説教・唱導の場、具体的には説話文学などの中では保守的に「誘」コシラフ人々の言葉による他の人への働きかけ」といった用法を堅持している時代に、和文の世界ではその用法に巾が生じ始めているのである。そこには、人々言葉人々の心といったものの三位一体的な不可分性が加担し、一方では和文の特徴―主格、目的格を特に人物の場合は文面に明示しないという構文上の特徴も又加担していよう。

ともあれ、今昔物語集以前、平安期において、コシラフの意義・用法にゆれと巾が生じ始めていることは明らかであり、それは、コシラフの意義・用法がその分だけ曖昧になったことでもあり、複合語のような形で同義反復的に語義を明示・説明する必要が生じたことでもあると考えられる。

五

ところで、前項にみた語義のゆれは、コシラフの場合、不思議に迅速に当代成立の古辞書の類の和訓に反映している如くである。次にその点を確かめてみる。和訓コシラフは、新撰字鏡以下の古辞書類にみられるが、それにあてられている漢字を抜き出して、次の第二表を作成した。和訓用例を見る辞書のみを掲げる。

第二表 古辞書にみるコシラフの漢字

新撰字鏡	類聚名義抄	色葉字類抄	世尊寺本字鏡集	和玉篇	温故知新書	易林本節用集	文明本節用集	黒本本節用集	伊京集	饅頭屋本節用集	天正本節用集	運歩色葉集
訓	諭、唱、謔、詠、説、誘、詰、訓、論、諭	誘、誨、詠、詠	誘、誨、詠、詠	誘	誘、訓、認、詠	誘調	刷	刷	刷	刷	刷	刷
言	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ	コシラフ
手	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル	コシラエル

(注) 古辞書は、ほぼ成立年代順に配列した。コシラフの訓をもつ文字をその部首によって、一応分類して示した。表中の「言」「手」という項目は、偏名である。文明本節用集以後の辞書には、コシラフ（ハ行下二段）の和訓は見出せず、コシラエル、又はコシラユルであった。この項目にまとめた漢字については、部首による分類は示していない。

昌泰年間成立と思われる新撰字鏡にみる次の和訓、コシラフが、和語コシラフの明確な事例として比較的早いものである。

。訓 尺之仁芝二反引也 (新撰字鏡、天治本、卷三、七ウ、8) 誘也 古志良不

ここに言偏の文字「訓」の和訓としてあらわれて以来、類聚名義抄では言偏、口偏、もしくは心の部首をもつ文字がコシラフと訓じられている。ところが第二表で明らかになように色葉字類抄にいたって初めてコシラフの和訓を持つ文字群の中に手偏の文字を見出す。その記載は次のとおりである。

。誘コシラフ誨扶臨詠詠己上同 (色葉字類抄、前田本、下9ウ3、黒川本、下8オ3、傍点、筆者)

言偏の文字に交って「扶」「臨」の二字が入っているが「扶」は「左也、助也」と注され、「臨」は「監也、視也、照也」など注されて上、高、尊の立場から対象に対峙する意である。いずれも人とかかわって人に影響を与える意義を持つ点で共通であるが、言偏の文字の中に入ればその手段、方法の拡散を示すといえる。前述の源氏物語の用例を考え合わせると一一四四年ごろから着手されたと目されている色葉字類抄に一字だけあらわれる手偏の文字はきわめて興味深い。語義に生じたゆれと巾が敏感に把握られ、古辞書に反映しているわけである。

ところで一般に辞書類において、語義とそれにあてて文字との

関係は必ずしも鋭敏であるとはいえない。元来辞書とは保守性の強いものである。第二表にもみるとおり、各種の節用集において、語形もコシラエル（コシラユル）と変わり、活用も意義も変わっても、なお「誘」字を保存するが如きである。微妙な語義の変遷をそのゆれの過程の中で即時的に捕え、文字の和訓に反映させてゆくことは必ずしも容易なことではない。和語における語義・用法の変遷とその辞書類への反映については稿を改めて考察してゆきたい。当面、コシラフについては、そのような用字の改変・追加を要求するような意義のゆれ¹¹拡大があったものと考えられる。

こうして色葉字類抄に始めて姿を現わした手偏のコシラフは、温故知新書以下、中世の古辞書において姿を消すことはない。そればかりか、文明本節用集以下においては、活用さえ大むねコシラエル（コシラユル）と下一段の形にかわり、易林本においてコシラフを保存する他、コシラエル（コシラユル）に傾いて統一である。文字も又統一的に「拵」「梲」が用いられる。「誘」はハ行下二段活用コシラフの時代のものであり、活用の種類を変えたコシラエル（コシラユル）は意味も又はっきりと変容したと考えられる。以下、今昔物語集以降の用例を検討しよう。

六

平家物語における十余例のコシラフは、人に対して言葉で慰め（一例）、説得し言いつくろう（八例）のような意義・用法で用いられており、本来的な語義での使用が目立つ。しかしその中で次の二例はどうだろうか。

。うつくしげなる髪をかたのまはりにはさみおろしかきの衣、袴に笥な（シ）どこしらへ、聖にいとまこうて修行にいてられり。（下、414ページ）

鎌倉殿の御ためとこそこしらへも（ツ）て候つれ共是程に運命つきはて候ぬるうえはとかう申にをよび候はず。（下、420ページ）

この二例については、文面上は勿論、内容的にも「言葉」のかかわる部分はない。心の企み、心もうけが中心ではあるが、具体的には言葉ではなく、「かきの衣・袴・笥」とか、引用本文の文面には現われていないが「刀・矢尻」などという品物を準備するという行動としてあらわれ、そしてそれはあくまでも「手」の動作である。単なる心用意・工夫ではなく、目的のためにすでに「手」によって行動をおこしている。ある意図をもって他を動かそうとしている点、伝統的なコシラフの用法と共通しているが、彼は言葉をつくすのであり、此は自らの手で具体的な用意を整えているのである。

宇治拾遺物語にみられる唯一のコシラフもこれと同様の例である。

。いとかく観音の導びかせ給なめりと思ていとど手をすりて念じ奉る程に則、物ども持たせてきたりければ食物どもなどおほかり、馬の草までこしらへ持ちてきたり。（二〇八話、265ページ）

観音信仰の功德譚として語られているが、このコシラフは、馬の草という具体的なものを用意するという、前掲・平家物語の二例にみたと同じに新しい用法である。一体に説話集においてはその内容上、「言葉をもって教化する」という本来的な意味を保ちやすい。今昔物語集とほぼ同時代の成立と目される古本説話集のコシラフが、「われはうへんにてかくはこしらへたる也」（下、

第六〇話、104ウ4、古本説話集総索引、208べ4)の如く、方便をもって教導する意であるのは当然としても、時代の下る古今著聞集においてさえ、全三例ともに同様の意義で用いられている。その中で宇治拾遺物語に新しい用法の例がみえるのは、宇治拾遺物語の当代性によるものと考えられ興味深い。この「用意する」「準備する」という語義での用例は、十五世紀成立の義経記などにも、次のように見出す。

。十郎権頭「今は中々こゝろに懸ゝる(事)なし」と独言し、かねてこしらへたる事なれば、走りまはりて火をかけたなり。(義経記、巻第八、387ぺ1)

又、蜻蛉日記や源氏物語などの和文の系統の作品においては、例えば十六夜日記に次の用例がある。

。したしげなる人々の袖のしづくもなくさめかねたる中にも侍従大夫などのあながちにうちつくしたるいと心くるしければさまさいひこしらへねやのうち見れば(日本古典文学全書260ぺ4)ここではコシラフは言フと複合した形で現われ、いろいろと言葉で慰める、なだめすかすという、きわめて原義に近い用いられ方がしてあるようである。

ところで徒然草の次の用例に注目しよう。

。さて宇治の里人を召してこしらへさせければやすらかにゆひて参らせたりけるが、思ふやうに廻りて(五一話、43ぺ1)

徒然草にみるコシラフはこの一例のみであるが、水車の製作をコシラフと表現している。ここでは、あれこれと工夫をこらして作り上げるという意義で用いられており、現代語コシラエルと全く同義である。現代語のコシラエルには、心づもり、材料や用具の準備、手順や方法の工夫などの過程を含めて「作り上げる」と

今昔物語集の「誘」(山口)

いう完成をも含めた行動を指している。徒然草においてコシラフの意義は遂にそこまで展開した。十四世紀初頭である。そして十五世紀成立の古辞書類は一せいに「拵」「拵」字をコシラエル(コシラユル)と訓じはじめる。^(まじ)

成立事情・伝承関係・言語位相などに振幅の大きい仮名草子においては、古典的なコシラフの語義・用法と、近代的なコシラエルの語義・用法とが、語形としては下二段コシラフを保存しつつ併存する姿をみせている。但し、古典的な意義・用法「言葉をもって」いう手段は保存していても、単に人の心を慰めるといいう、いわば工夫・工作の要素の少ない用法はもはや現われず、言いくろい、策謀し、虚言をさえ辞さぬという内容の用法に傾くようである。

。鳥の云、軍に負けて今はかうよと見えける時、かうもり畜類にこしらへ返る。(伊曾保物語 中、卅三、423ぺ16)

これは、こうもりが、口実をもうけいつくろって寝返りをうつ意であるから「言葉によって」という原義が生きているものと一応考えてよい。しかし次の用例をみよう。

。後家聞ひて「げにも今夜は月見の管弦にておはします。人に紛れて自らと、いざや御出で候へ」とて、やがてこしらへて、かの恨の助を女房に出で立たせ、薄衣を引き被かせ (恨の介、下、76ぺ5)

。詩作り歌詠みども日頃より含句を拵へて、只今作りし様にもてなし、うめきすめきて詠み出す。(浮世物語七、333ぺ14)

これらのコシラフは、「恨の介を女装させる」「含句をつくる」という具体的実的な主体の行動をあらわす。恨の介に紛装をさせるのはもととも存在している恨の介の形・状態を一時的に変え

るにすぎないが、含句をつくるのは無から工夫・才覚によって構え作り出すことであり、現代語のコシラエルに同じい。この意義・用法のコシラフは、例えば、

。「一尺四方の箱一つこしらへ、上をばうつくしく作り飾りて、中には石多く入て……」(伊曾保物語上、382 ぺ 14)

のように、同じ伊曾保物語の中で「誘」に該当するコシラフと併存している。この時期は、文明本以下の他の節用集がコシラエル(コシラユル)を採る中で、易林本節用集がひとり、コシラフを保存せねばならなかった如く、一つの過渡的な時期とみてよいであろう。

こうしてコシラフの用例は、次第に「構え作る」「仕上げる」「完成する」という手仕事の要素を強めつつ、西鶴の作品などになると殆んどすべてが現代語的な意義になり終ってしまう。

。近年工夫して鯨網を拵、見付次第に取損ずる事なく今浦々には是を仕出しぬ。(日本永代蔵 75 ぺ 11)

。臨時に衣装を拵へ、用捨なく着ふるし、(日本永代蔵 131 ぺ 12)

これらの用例は現代語で「作る」とほぼ同義の、やや丁寧ないい方という語感で扱えられているコシラエルと全く同様の用法である。着物をコシラエル。料理をコシラエル。庭をコシラエル。子どもまでもコシラエル。

現在コシラエルにあてることもある「拵」の文字は古辞書においてはコシラエルの和訓を伴うものとしては温故知新書に初めて現われるが、この文字を大漢和辞典(諸橋轍次)に検してみよう。

(一) よる(集韻)拵、据也。

(二) さす、さしはさむ(集韻)拵、挿也

〔邦〕(一) こしらえる、こしらえ

(二) かこひ(肥後の地名)

(一)のこしらえるの項においては和漢三才図會・芸才・倭字の項をひき、「拵、倭訓拵與調同、義有ニ少異、拵、新作成之義、調、和合整飾之義、故用ニ拵字ニ別之乎、蓋拵、音存、据也、義不ニ相當。」と記してある。すなわち、中世以降のコシラフは、まことに「手をもって新たに存在せしめる」の意に用いられているのであるから「拵」は適切至極な造字ともいえるが、たまたま「据也、挿也」の意で用いられていた文字と一致したものである。コシラフの語義・用法が、今昔物語集以降大巾に変遷し、もはや伝統的な「誘」字以下の言偏の文字とは相容れなくなった時、即ちコシラフが言葉を媒介とする行為ではなくなった時、その傾向をうけて「扶」字を持ち出し、更には語義・用法どおりの文字をコシラエたのである。

七

以上でコシラフの語義変遷の過程はほぼ明らかになったものと思う。本来コシラフは、「他の人間に言葉で働きかけ、その言辞の効果を他の人間の感情・意志・行動の変容にみる」というまことに人間らしい営みを表わす語であった。そこでは、その働きかけの行為そのものに表現の力点があり結果を問わないものでさえあったが、次第に「手段をめぐらす・手だてを工夫する」という媒体への工夫・才覚に力点が移り、「準備する・用意する・計画する」という段階を経て、遂には仕事が完成すること、その

完成自体に表現の重点がおかれるようになった。

今昔物語集の「誘」を手がかりに、コシラフの語義変遷を辿ってみた結果、その変遷は他動詞のままで行なわれたことが分った。但し、同じく他動詞とはいっても、表現の力点には明らかな推移がある。それは、一言にしていえば、自己から他への流れとしてとらえ得よう。つまり、コシラフは、「言語を發して他に働かしかけ、慰め励ます」という自己の言語行為そのものが表現の中心であった段階、他を教え導びくという教化の行為そのものの表現であった段階から、他へ及ぼす影響そのもの、すなわち働かしかけられた対象の変容を問題にし、物体が作り上げられるという、きわめて具体的・現実的な表現内容を主とする段階へと移行・展開したのである。この推移の方向は、明らかに自己から他へという道筋である。

自己から他へ、内向きから外向きへというこの変遷の方向が語義変遷の一つの大きな型なのではないだろうか。この方向は、前稿で「繚」に見た自動詞から他動詞への流れと軌を一にする動きである。コシラフにおいては下二段から下一段へという活用の種類の変化も起り、より明瞭・客観的・具象的な表現内容への傾きという語義変遷と並行した。これは「誘」の場合にたまたま一致したにすぎないのではなく、中世を通して著しい動詞の一段化傾向は、自己から他へ、内から外へというこの語義変遷の方向と無縁ではないと今のところ考えている。

注

- 1、『今昔物語集の「繚」―自動詞と他動詞の間―』山口康子（長崎大学教育学部人文科学研究報告、第二十八号、昭和五十四年三月）
- 2、『平安初期に於ける格助詞「を」』松尾拾（国語と国文学、昭和十三年十月）、『今昔物語集の文体の研究』松尾拾（明治書院・昭和四十二年十一月）
- 3、日本古典文学大系（岩波書店）今昔物語集、卷十一第六語の頭注、36
- 4、調査は、すべて日本古典文学大系本（岩波書店）による。次の文献には、用例を見出さなかった。竹取・伊勢・大和・篁・平中・堤中納言・浜松中納言・狭衣・枕草子・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記
- 5、時代別国語辞典、上代編（三省堂、昭和四十二年）「コシラフ」の項による。
- 6、大漢和辞典、諸橋轍次（大修館書店、昭和三十二年）の記述による。
- 7、「拵」「拵」字は、古くは、カコフと訓じられている。新撰字鏡には見出さないが、類聚名義抄において「拵_{カコフ}（佛下本 120、7）、拵_{カコフ}（佛下本 82、3）、色葉字類抄において「拵_{カコフ}」（前田本上 102ウ3、黒川本、上 83、ウ5）とある。又、今昔物語集に唯一例を見出す「拵」字の例は次のとおり、右の名義抄、字類抄の記載と一致している。四段動詞であるし、大系本の訓みのとおり「カコヒメグラシタリ」と訓じるところであろう。
・見バ垣ナド拵ヒ廻タリ。（三一―14、273ペ5）

（昭和五十四年十月三十一日受理）